

ヨーロッパの旅

平井信義

西ドイツに生活していた時、私は湯わかしの音でよく目がさめた。その湯わかしは、私の部屋の中にある湯わかしではない。私の部屋から廊下へ通ずる戸を隔てて、その廊下を六、七歩あるいた所にある台所から、きこえてくるのである。特に日曜の朝などは、教会にいくおばあさんが、私より早く起きて、ガス炉の上に湯わかしをのせるのであった。

湯わかしの音——と言えば、我々日本人の耳に響いてくるのは湯のたぎる音であろう。湯のたぎる音は、秋の夜や冬の朝、火鉢の上の湯わかしからきく時など、なかなか趣きのあるものである。特に、茶の湯のセレモニーの時に、鉄の湯わかしの中でたぎる湯の音をきいていると、次第に気持の落ち付きを取り戻して行くものである。

ところが、ドイツにおける湯わかしの趣きは全くちがう。第一

それには水を注ぐ口が横についていないのである。その代りに、てっぺんに口があって、そこから注ぐようになっていく。しかもその口には笛がついているのである。そして、水が沸騰してくると、その蒸気が吹き出す際に、笛を吹き鳴らすのである。すさまじい勢で、ビービーと鳴る。皆さんは、以前往來を流していた羅宇屋の笛をおぼえているだろうか。それよりも甲高く強く鳴り響く。とても落ち付いて寝ているわけにはいかなない。一丁も離れた向いのアパートの各階からも、響いてくることしばしばである。そうすると時を経ずして、女の人の影が台所らしい部屋の窓ごしに動き、それと同時にビービーと言う音は消えてしまう。

この湯わかしの笛は、沸騰したことを知らせるためのものである。沸騰したら、それ以上火を燃やしておくのは不経済なことである。その不経済をなくすために、ドイツ人の誰かが考案したも

のにちがいない。そのためにどれ程ガスの経済になっているか、科学性を重んずることの好きなドイツ人たちは、恐らく細かい計算をし、それを信頼してこのような湯わかしが普及したのではあるまいか。その真疑の程は知らないが、朝の静寂を破る笛の音であることにはちがいない。その笛の音も、警笛なのである。儉約を重んずるための警笛なのである。

子どもたちが、朝起きてから幼稚園に行くまで——と聞いても、その趣きは、我が国の場合とドイツの場合とは非常にちがっている。この湯わかしの音一つにせよ、ちがっている。西ドイツでは、湯わかしの蓋を押し上げて、沸騰した湯が、ざっと流れ出ることは先ずない。我が国のように、子どもの身仕度をしている間にあふれ出た湯の音に驚いて、台所に飛んでいくというお母さんの姿を見ることは出来ない。そこには、常にピーピーという音によって行動する母親の姿があるだけである。

ガスに火をつける——という場合も、我が国とドイツとは異っている。我が国では、マッチを擦って火をつけることだけを考えればよい。但し、マッチも二本の棒を一度にこすりつけるお母さんもあるうし、或いはマッチの軸木が途中から折れて、舌打ちをしながらもう一度擦り直すお母さんもあるう。ところで、ドイツではどうか。多くの家庭では火打石を使っている。火打石といっても、ライター石の少し大きいものがはめこんである部分を、

やすりの部分にこすりつけるように仕組んである簡単な金属製の器具である。日本の貨幣価値に換算して、一つ三〇〜四〇円のものであり、石の方は五〜一〇円くらいで買ったと思う。この器具を使って、一〜二回がちゃがちゃ言わせるとガスに火がつくというわけである。使ってみると、なかなか便利であるし、それにも増して節約となる。その火打石を四〜五人の者が半年も使っていたわけであるが、石の減り方はすこぶる遅い。

もともと、西ドイツにしてもその他のヨーロッパの国にせよ、マッチを景品にしてくれるお店はない。自分で買わなくてはならないのである。従って、我が国の事情とは非常に異っている。我が国ではどこのお店へいっても、マッチ箱くらいはどんどんくれる。私の知っている奥さんで、努力してマッチ箱をもらつてくると、一年間に殆んど買わないですむというのである。その話を他のお母さんの集りでしたら、そのようなことは当然だ——という顔をされてしまった。

とにかく、朝の行事は、がちゃがちゃと火打石を使うことから始まり、ピーピーで最高潮に達するといっても、大げさな表現ではない。わかした湯でコーヒーを作って、それでパンを一〜二箇嚙るのが朝飯となるからである。或いはオートミールを食べる家もあるが、多くはパンを食べている。そのパンは、ちゃんと朝飯に間に合うように配達されているし、皮の厚い丸いパンで、ドイツ

人はこれをブレチェン Brechen と呼んでいる。

朝の趣きがこれ程にちがっている二つの国で、その趣きの中に育っている子どもが、朝に対する感じを、それぞれ別を受け取っていくことは、当然のことである。その中で生活観が育くまれていくから、当然異った生活観を持っていくことが予想される。

☆

ドイツの冬——それは、急速にやってくる。私の下宿の窓から、読書の目を休めるために見遣っていた銀杏の木の緑の葉も、十月の声をきくと急に黄いばみ、一週間前後で雨が降るようにさわさわと音を立てて散ってしまう。そのあとに残るのは、木のむくろだけとなり、それは悄然として立っている。しかしながら、部屋の中は暖い。十月からはスチームが入るからで、私はいつも浴衣一枚でいたし、そのようにして、外は零下一〇〜二〇度の冬を過ごしてしまった。従って、秋の涼気を肌身感じ取るには、戸外に出るより他はない。私は、寒々となった窓外の風景を見ながら、日本にいる時には、この自分の肌で、秋の深さが迫ってくるのを感じ取ったものだがと、思い返していた。

障子のしまっている部屋にいても、破れ障子をはたはたと鳴らしながら流れこんで来る秋の風は、初めは快く、次第に刺すよう

に肌味に感じたものである。障子をあげれば、秋の風情と直結した家・庭・樹木・空がひらける。そしてそれらが自分と一体となる場合もあり、歌句もうかんでくるといふものである。

一体、私ども日本人の生活が西欧化していくことがよいのだろうか——と考え込んでしまうのは、このような時である。急速に進んでいる西欧化の中で、どのような面で東洋人としての生活のニュアンスを残していくのだろうか——異国にいて、そのアパートの窓から夕暮を見ながら、日本人の生活を改めて考え直してみることがしばしばあった。東京のような都会では、既に生活の表面では西欧化が起きている。それは便利であり、能率的であり、経済的である場合が多い。それを批判的に見ることが出来るのは、西欧化の進んでいなかった時代に幼児時代を送った人間である。西欧化が進んだ中で生活している今の子どもたちは、その生活の中から、我々とは異った生活観や季節感を受け取っているにちがいない。それらが彼らの成人した時にどのような形となって、表現されることであろうか。——そんなことを、私はよく考えてみては、淋しさとうれしさとが入り混ったような気持ちに捉われたのである。

スイスのチューリッヒ湖畔で、たまたま若い精神科医のチールマン氏と、そのことについて話し合ったことがある。彼は、ぜひ一遍日本を訪れてみたいという。そして、自分の目で日本の中に

残っている東洋的なものを見たいというのである。「欧米における生活は、強く物質文明・機械文明に支配されています。そこには、合理主義に基く一つのよい生活があると思います。しかし、それには限界があると私には思えてならないのです。形而上的なもの——人間にはいつの世の中でも、それを求める気持が存在しているのではないでしょうか。それが眠っているように見えることもあります。西欧では、この数十年間、そして最近特に、形而上的なものへの一般の憧憬が消えて、即物的となりました。それが、精神医学の中でのももの考え方にも反映して来ています。しかし、精神というものは、それでは理解しつくされない。その点で、東洋人の生活の中に、形而上的なものがどのように反映しているかを、私は見たいのです」と彼は言った。

このような考え方は、私にはいさか古いものと思え、彼の中にはむしろエキゾチックな憧憬の方が強く動いているように感じだったので、私はどのようにそれに対して答えようかと、迷っていた。

しかし、彼は私のことばがないことを、どのように解釈したのか「あなたに、禅のことについて少しお伺いしたいのですが——」
と言いだした。

「私は、禅に非常に興味を持っています。こちらの国でもいく冊か禅を紹介した本が出ていますし、日本にいたことのあるスイス

の哲学者の講演でもききました。禅の考え方が日本人の生活にも現れているとききましたが、おもしろいことですね」と言って、丸く且つ青く澄んだ目に興味一杯を溢れさせて言った。「『隻牛の声』ということ、私にはよく分らない。しかし、考えてみなければなりませんね」——こんなことも言った。

私も高等学校の頃、今から思えば興味本位ではあったと思うが、その頃はかなり真剣な気持で、禅寺にいったことがある。考按は思うようにとけなかったが、結伽しながら聴いた松籟の音は、今でもふと蘇ってくることもある。殊に、雑務に追われてへとへとに疲れた身体を、籬椅子に投げ出した時などに、ふと庭先の松を見るとその時の松籟の音が、私の心を捉へてくれる。そんな時、一体自分は何のために生きているのだろうか——という思いを呼び起こし、生命観に立ち向かわせてくれるのである。それに対する回答が、浅はかなものではあっても、我々の日常生活の一端齷に、人生を考える一と時のあることは、有意義なことではないだろうか。或いは、自分に即しての問題ではなく、一体、何のために子どものことに関する仕事をしているのであろうか——と考えることも、無駄ではなからう。それが自然と結びついていることが私には興味深い。

☆ ☆ ☆